

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

転向者・小川未明(下) 一階級闘争から八紘一宇へ

著者	増井 真琴
雑誌名	日本文学文化
巻	16
ページ	38-47
発行年	2016
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00009404/

転向者・小川未明（下）

——階級闘争から八紘一字へ——

三 国家主義の影響

大正期、「ブルジョアを脅威せよ！」と煽り、社会主義の立場を鮮明にしていた小川未明だが、昭和一〇年代に入ると一転、「私達の民族的理想として、東亜新秩序の建設があり、国防国家の完遂がある」（『新しき児童文学の道』『都新聞』昭和一六年五月一二・一三日）と語る国家主義者へ変貌してしまう。本節では、この時期の未明の軌跡を辿りたい。

昭和初期の未明は、まだ社会主義の影響下にいた。反資本主義の姿勢、階級対立の世界観は、健在だったと言えよう。例えば、新興童話作家連盟の「声明書」（『童話運動』昭和四年一月）や、童話「労働祭の話」（『童話の社会』昭和五年五月）には、それらの思考が如実に表れている。とは言え、当時の未明は、階級闘争を通じて社会変革を大正期のようにストレートに訴えることはなくなっていた。代わりに、階級闘争の立場から文学や社会を一元的に裁断しようとするマルクス主義者のあり方を、「強権」（『新興童話の強圧と解放』『童話文学』昭和四年八月）、「残忍」（『児童のために強権主

増井真琴

義者と戦へ」（『黒色戦線』昭和四年八月）、「窮屈」（『新文芸の自由性と起点』『東京朝日新聞』昭和四年一月一五・一六日）であると批判している。いわば、未明のアナボル論者だが、かつて「自己の悩みは、即ち自己の属する階級的の悩みである。自己を桎梏の苦しみから救ふには、階級にまつはる鉄鎖を切断しなければならぬ」（『闘争を離れて正義なし』『中央公論』大正一一年七月）と断じ、階級闘争の正義性を確信していた彼の階級闘争観に、ある後退が生じていることが認められよう。

実際未明は、ボル派との方針の相違から、新興童話作家連盟を脱退してすぐ、脱退してしまった。ボル派の論客・大河原浩は、未明脱退後の「童話運動」誌上で、次のような未明批判を展開している。

吾々は、マルクス主義的に社会を見得ない朦朧イデオロギスト、民主々義者（ママ）を排撃しなければならない。彼等は労働者農民を裏切る。——裏切者を殺せ！ 吾々が、小川未明を排撃するのである。

大河原浩「小川未明論（二）」（『童話運動』昭和四年八月）

未明は芸術家の立場から、童話における「批判と詩化との釣衡」〔『童話文学について』「童話運動」昭和四年二月〕を主張していた。しかし、大河原のような純正のマルクス主義者にとつて、階級闘争の立場に立ち切らないこのような未明の態度は、小市民的な、中途半端なものとして映った。

この頃、昭和四年は、小林多喜二と徳永直が「蟹工船」「太陽のない街」を発表し、プロレタリア文学が流行を見せる反面、前年の三・一五事件から四・一六事件へと、共産主義運動に対する官憲の弾圧が本格化していた時期でもある。他方の未明は、翌昭和五年、円本ブームで多額の印税を得て、高円寺に初の持ち家を購入。岡上鈴江は当時を次のように回想している。

しかし、ながい貸家すまいに終止符を打って、小さいながらも総檜づくりの家に移り、はじめて自分の家の檜の風呂に入った父はたのしそだった。たつぷりお湯をわかつて、ざぶりと入り、お湯がどつとあふれるのが好きだった。

岡上鈴江『父未明とわたし』（樹心社、昭和五七年五月）

治安維持法適用で、多喜二らが大量投獄される中、未明は逮捕されることなく、生活の安定を勝ち取っていった。逆に言うと、逮捕を伴うような血みどろの革命運動とは無縁だった。

しかし未明の社会主義が、終局、書斎の人のそれであつたにせ

よ、昭和六年九月の満州事変を経て、日本社会にファシズムが台頭していく中でも、彼は「研屋の述懐」（『民政』昭和九年九月）など、反戦的なヒューマニズムに溢れる作品を書いている。ところが、昭和十二年七月、盧溝橋事件が起き、日中戦争が勃発すると、未明は反戦を放棄する。同年一〇月、自身が主宰する童話雑誌「お話の木」に「僕も戦争に行くんだ」を発表したので。これは小学生の主人公・勇ちゃんが、溶接工場のおじさんの出征を見送り、「万歳」「僕も、戦争に行くんだ」と叫ぶ内容で、山中恒と小笠裕二は、未明の国策協力の嚆矢の作品と位置付けている。日中戦争後の突然かつ急激な右旋回には、「国難」に機敏に反応してしまう、明治人特有のナショナリズムが背景にあるというのが、山中や小笠の他、多くの識者の見立てだ。^③

昭和十三年に入ると、四月に国家総動員法が施行され、戦時体制は強化された。そんな中、内務省警保局図書課は、国家による児童図書統制を企てる。中心となったのは図書課担当官の佐伯郁郎で、佐伯はまず、当時「俗悪」と批判の声が大きかった絵本（赤本）類を、検閲や発売禁止の処分を取り締まった。次に、未明・百田宗治・城戸幡太郎・波多野完治ら民間有識者に、児童図書改善のための答申を依頼した。未明は次のような答申案を提出する。

児童教化によつて、社会の矛盾を除去し、善美の国家を建設したいと思ひます。国家の力にて、児童にとりて、有害なるものを除き、健全な教化に邁進したならば、今後十年にして日本精神を体得した立派な国民が養成されることによつて面目を一新

するでありませう。(中略) 日本精神を基礎とする教育は、道徳国家の建設であつて、これまでの物質至上の資本主義や、功利主義の線の上では、教育なされぬものであつて、第一歩から出直して児童を教化しなければなりません。今迄の物質第一、精神第二であつたのを精神第一、物質第二に価値を転換するのであります。此の如きは国家の力にしてはじめてなされるものです。これまでの教育が、立身出世を目指したとすれば、これからの教育は滅私奉公の信念にあります。従つてこれまでと正義感も異なれば、幸福感の内容すら異なる訳であつて、読物の統制が必要であります。

「児童雑誌に対する理想案」(「出版警察資料」昭和一三年七月)

ここで未明は、政府主導の言論統制に諸手を挙げて賛成し、「日本精神」をもつて児童を教化するべきだと説く。昭和初年代、マルクス主義イデオロギーによる、児童への硬直した指導を批判していた未明が、ここに至つて「日本精神」の名の下に同様の押し付けを行っていることは、皮肉だ。

この時期、未明は盛んに「日本精神」を鼓吹していたらしい。未明と共に民間有識者を務めた波多野完治は、戦後次のように回想している。

昭和十三年十月ごろ、例の内務省の児童圖書の浄化措置という時に、内務省で第一回の会合やったんです。その時はじめてお目にかかった。その時の印象は、小川先生はさかんに日本精

神、日本精神といひまして、ほかのこと何もいわないんですね。非常に議論の好きな、しかしその議論というのは展開しない議論なんですね。(笑) テーマだけを強調するという。

波多野完治他「座談会 小川未明の人と文学」
〔日本児童文学〕昭和三十六年一〇月

前節で、秋山清と続橋達雄は、未明の社会主義の没理論性を指摘していた。それはこの時期の、「テーマだけを強調する」「展開しない議論」と、見事に符合している。とまれ彼はここで時代に便乗し、国家統制の一翼を担う役回りを演じている。未明の協力もあり、同年一〇月には「児童読物二関スル指示要綱」が完成。児童図書における教育・啓蒙的側面は一段と強まった。

昭和一五年は、皇国史観で皇紀二六〇〇年に該当する。この年は、九月に日独伊三国同盟が調印され、一〇月に大政翼賛会が発足するなど、戦時の色合いがますます濃くなっていった年だ。未明もまた、『夜の進軍喇叭』(アルス、四月)、『新日本童話』(竹村書房、六月)、『赤土へ来る子供たち』(文昭社、八月)といった、時局色の強い童話・随筆集を立て続けに出版している。一〇月、童話作家協会が解散すると、一二月には、その後釜となる日本児童文化協会の創立準備懇談会が、大政翼賛会主催で開催された。未明が分会委員を委嘱されたこの準備会は、情報局主導の下、幾多の会合を重ね、後の日本少国民文化協会へ発展を遂げる。滑川道夫によると、設立準備会での未明の口吻は勇ましいものであったという。

少国民文化協会設立の会合などではしばしば目撃したところであるが「われわれ日本人は、この非常時局にあたつて……」と卓を叩かんばかりに愛国的熱情を吐露して少国民文化建設を叫んでゐる氏の姿は、実に国民生活童話建設の先駆者といった感銘を与へる。

滑川道夫『少国民文学試論』（帝国教育会出版部、昭和一七年九月）

日本少国民文化協会は、総則に「本会ハ皇国ノ道ニ則リ国民文化ノ基礎タル日本少国民文化ヲ確立シ以テ皇国民ノ鍊成ニ資スルヲ目的トス」（日本少国民文化協会「設立趣意書・定款並諸規定」と定める、天皇制国家主義がドグマの児童文化団体だ。

昭和一六年一二月、皇太子の誕生日に合わせて、日本少国民文化協会は発足。翌一七年二月、今度は紀元節に合わせて、発起式を開催した。この式には、時の東条英機首相も参列し、祝言を述べている。日本少国民文化協会は、官許の御用団体として、華々しいスタートを飾つたのである。以後、未明はこの協会の役員（文学部会相談役）として、巡業の講演会に参加したり、機関誌「少国民文化」「少国民文学」や会報「日本少国民文化協会報」へ作品を発表したり、銃後で戦意高揚に努めた。昭和一九年一〇月には、第一回少国民文化功労賞を受賞している。だが、「皇国」は負け、未明は敗戦の日を、高円寺の自宅で妻と迎えた。

四 「アジア共同体が真理なのであります」——聖戦のプロパガンダ

かくして小川未明は、日中戦争を機に右旋回し、内務省警保局や日本少国民文化協会といった国家機関へ協力。児童図書統制と皇民育成に努めた。本節では、この時期の未明の思想傾向を、作品に即して検討してみたい。

日中戦争以後の未明の文章を彩っているのは、第一に、天皇制の賛美である。

すでに、いまの日本は個人主義を許さない。全体の利福のために行動しなければならぬ。職能の別はあつても、共に同じ陛下の赤子で、兄弟である。始めから、貴賤の別も、階級の別ちのあらう筈がない。かうした矛盾から生ずる、対立と反目を除去することが急務だ。

「日本的童話の提唱」

〔報知新聞〕昭和一四年九月二〇—二二、二五—二六日

従前述べているように、大正期の未明は階級闘争主義者だった。それがこの段階では一転、階級存在を否定している。ブルジョアもプロレタリアも「陛下の赤子」であり、天皇という極点の下、階級対立が溶解してしまっているのだ。これは未明が、家族国家観を有していたからだろう。例えば未明は、「日本の家族制度は、日本精神を中軸とする、世界無比のものである。皇道日本は皇室中心の一大家族でないか？ 上下三千年、これがために和協一致が保たれたのである」（「日本的童話の提唱」同前）と語っている。天皇を「国民の父」に、国民を「陛下の赤子」に見立て、国家を一つの家族に

準える家族国家観は、まさしく、天皇制国家の支配イデオロギーだった。ファナティックで非科学的な国体論を、この時期未明は信奉していたのである。

そして彼は、「陛下の赤子」として、国民は国家に忠誠を尽くすべきだと説く。

国家に対する愛は、即ち自己犠牲である。母親は子供のために、我身の細ることも苦痛と感ぜないであらうし、大君のために、国民は殉ずることを至上の喜びとしてゐる。いづれも清純にして、熾烈の愛を感じるがためです。

「創造の歓喜に生きよ」(「祖国」昭和一五年四月)

君に忠にし、親に孝にし、国家を愛することは、人間としての、日本人としてのよろこびがあることを高調し、滅私奉公の精神の中にこそ、真の幸福があるといふ、最高の倫理観を、自己に確立すると共に、児童達にも説かねばならないのであります。

「指導者自らが燃え立たずば」

『新しき児童文学の道』フタバ書院成光館、昭和一七年二月

「大君のために、国民は殉ずることを至上の喜びとしてゐる」「君に忠にし、親に孝にし、国家を愛することは、人間としての、日本人としてのよろこび」。あるいは未明は、「苟くも生を皇土に享けるものは一木一草と雖も皇土のために役立つべき」(「当面の児童文化」

「報知新聞」昭和一五年二月一(五日)とも記している。こういったお上への滅私奉公を是とする感覚は、未明が高田の旧下級士族の家で生まれ育ったことに由来するだろう。続橋達雄は、未明の「土族意識の強さは、かれの人間観や倫理意識をその根底から支えているものの一つ」(『未明童話の研究』明治書院、昭和五二年一月)であると分析している。

しかし、生育環境からなる土族意識が、家族国家観とどれだけ親和性の高いものであったとしても、土族意識だけがこの時期の未明の言説を規定したわけではない。そこにはやはり、国策への屈服、時代への便乗があったのだ。『国体の本義』(文部省、昭和一二年三月)や『臣民の道』(文部省教学局、昭和一六年三月)を読むと、未明の文章が、当時の施政者の要請に、優等生的に即応したものであることがわかる。かつて未明は、「意義ある作家は、常に其の時代に孤立しなければならぬ。思潮とか、主義に漂つて、同じ方向に流れてさへ行けば、安全だと思ふような卑怯な作家に、決して、永遠に残る作品は書けない」(「我が感想」『早稲田文学』大正七年二月)と断じていたが、この時期の未明はまったく社会的に孤立していない。「思潮とか、主義に漂つて、同じ方向に流れて」行く、国家の提灯持ち以外の何者でもなかった。

第二の特徴は、アジア・太平洋戦争の推進である。

然るに今度の事変は、私達に民族的の自覚を促した。私達は、誰も彼も今や新しい世界観の上に立つて、新しい文化の建設に向つて再出発をしなければならぬ要請されてゐる。即ち、私

達の民族的理想として、東亜新秩序の建設があり、国防国家の完遂がある。それ故にすべての作家は、文学行動を通して、翼賛し協力しなければならぬのだ。

「新しき児童文学の道」〔都新聞〕昭和一六年五月二二・二三日

ここで使われている「東亜新秩序」の語は、昭和一三年一月三日に近衛文麿内閣が発した第二次近衛声明「東亜新秩序建設の声明」〔内閣情報部編「支那事変に関する政府声明及総理大臣演説集 第一輯」昭和一四年二月〕に由来する。この声明で近衛は、日中戦争の目的を「帝国の冀求する所は、東亜永遠の安定を確保すべき新秩序の建設に在り」と定義、「今次征戦究極の目的亦此に在す」と大義を与えた。そしてこの新秩序建設にあたっては、「日滿支三国相携へ（中略）東亜に於ける国際正義の確立、共同防共の達成、新文化の創造、経済結合の実現を期す」べきだと説く。反共思想に基づく、大アジア主義だ。

未明はこの時期、アジア共同体の理想に燃えていた。

すべて、革新的の理論は、その境遇上の必要から生れて来る。ユデヤ民族にとつて、唯物史観が真理なる如く、東洋民族にとつて、アジア共同体が真理なのであります。しかもこの結合の様式と、八紘一字の精神こそ、全人類を救ふに足るものでありませう。

「我を思はば国家を思へ」
〔新日本童話〕竹村書房、昭和一五年六月

東亜の新秩序は、日滿支蒙の国家が、不可分一体とみることに始ります。是等の共同体は機械的に、強制的に、結合される形だけのものでなく、実に道徳的感情にまで、融合する有機体でなければなりません。そこに東洋人としての愛が、根底をなしてゐます。他面には、地域的に、歴史的に、また利害關係に立つ、現実の諸問題から、自然互に相依る本能を有するに至つたのであります。

「新組織新感情」
〔新しき児童文学の道〕フタバ書院成光館、昭和一七年二月

思ふに、国家として、独立、自由の矜持なくんば、何の国家と称し、民族といひ得よう。我が日本は、実にそれ故に東亜後進諸民族のために、これまで搾取と暴戾を恣にしたる、米英の鉄鎖を断ち、永遠にその禍根を絶たんとして立上つたのである。

「解放戦と発足の決意」〔日本少年国民文化協会編「少年国民文化論」

国民図書刊行会、昭和二〇年二月

日本を中心とした、政治的・精神的なアジアの統一を説くアジア共同体の考えは、防共を旨とする近衛内閣の「東亜新秩序」から、欧米列強の植民地支配との対峙を説く東条内閣の「大東亜共栄圏」の理念に引き継がれて行つた。それは表面上、アジア諸民族の共存共栄を謳う美辞麗句でありながら、実際は皇民化教育や資源の接収など、日本帝国主義の利害と打算に基づく植民地支配に過ぎなかつ

た。日中戦争以後の未明には、こういった自国の侵略戦争に対する批判の目はない。続橋が「政府の口吻そのまゝ」(『未明童話集』「夜の進軍喇叭」序論)「野州国文学」昭和五四年一月)と指摘するように、ここには国家の施政者と同じ目線で時局を語る未明の姿がある。大正期、童話「野薔薇」(『大正日日新聞』大正九年四月二二日夕刊)や小説「血の車輪」(『文学世界』大正一一年一〇月)で、国家の都合に翻弄される民衆の惨禍を描いていた未明とは対照的だ。

第三の特徴は——社会主義時代と同じく——資本主義の否定である。

私は、日本の今後の文化が、日本精神に立還るに当つて、もう少し資本主義の弊害をここにいつて置く必要がある。人間が、金や物質に縛られることによつて、永い人間性を無視してきたのだ。(中略)資本主義は、いろいろの分業を産み、人間を機械に隷属せしめ、人間を退化せしめたのだ。

「日本の童話の提唱」

(『報知新聞』昭和一四年九月二〇—二二、二五—二六日)

たとへば、酒や煙草の害毒をよく弁へるものでも、これを禁絶するとなると、並ならぬ苦痛を感じるのが常であります。なぜこんなことを言はなければならぬか、金銭が人心を腐食し世道を頹廢したことは、到底酒や、煙草の比でなかつたのを反省なさしめるためです。アルコール中毒や、ニコチン患者は、半身

不随意となり、普通は、痴呆となるが、金銭中毒者は、物に対する正視を失ひ、何を見、何を考へても、貨幣価値しか浮んで来ないのであります。

「美しき夢を持て」(『新日本童話』竹村書房、昭和一五年六月)

いつしか金銭に隷属し、職業意識に囚はれたる自己を反省し、敢然として之を捨て、自由主義時代に感染したる、心の汚辱を一洗して、真に日本精神に生き、国家に殉ずることである。思ふに、人類が、曾ての素朴なる自給自足の原始性を喪い、畸形に機械化された重なる原因は、資本主義が分業を課して、利潤の増進をはかつたがためである。そのために、著しく天賦の創造力も、冒險心も、勇氣も、決断も、衰へたのである。

「解放戦と発足の決意」(日本少国民文化協会編『少国民文化論』

国民図書刊行会、昭和二〇年二月)

社会主義を捨て国策協力へ走つた未明だが、大正期に見られた資本主義批判は健在だ。ただし、相違点が二つある。一つは、社会主義時代の資本主義批判には、根底に持つ者と持たざる者の格差への義憤が存したのに対し、国家主義時代にはそういったヒューマニズムが見られないこと。代わりにこの時期は、資本主義に伴う、トータルな人間性の墮落が問題視されている。二つは、かつての未明は、資本家階級の強圧に対して「ブルジョアを脅威せよ」(『労働祭に感ず』「時事新報」大正一一年五月一日夕刊)と叫び、資本家階級が労働者階級の「一方が征伐せらるるまでは争闘が続けられべく考

へらるる」(「本然的の運動」「新潮」大正八年九月)と階級闘争を呼び掛けていたのに対して、階級闘争を捨てたこと。代わりにここでは「日本精神に立還る」ことをもって、資本主義とその悪風を一掃しようと説く。

山中恒は二点目の推移の要因について、「還暦を迎えた未明が時勢に乗るために、これまでの公教育思想や文化財を資本主義の悪しきものと批判するためには、唯物史観や社会主義以外に拠り所を求めるとすれば、これはもう国体原理主義に依るしかなかった。せっぱつまった未明としては、そこへ避難せざるを得なかったのだろう」(『戦時児童文学論』大月書店、平成二二年一月)と、分析している。確かに、昭和初年以來、官憲の弾圧により、社会主義運動が徹底的に鎮圧されていた以上、階級闘争の力で資本の運動に制約をかけることは期待でしなかつた。代わってこの時代は、労働者階級ではなく天皇制国家が、資本の活動を制限し得る絶大な権力を有していた。社会主義を諦めた還暦老人が、資本主義を批判するための方便として「国体原理主義」へ接近したという山中の見立ては、おおむね正しかろう。しかしその接近の程度は、決して「避難」の語で尽きるような、軽いものではなかつた。

おわりに

以上見てきた通り、大正から戦中にかけて、未明は社会主義者から国家主義者へと変身を遂げる。思想的には一八〇度の「転向」だ。本稿では最後に、この間の未明の転向を、大きく三つの観点から整理したい。

一つは、階級対立の認識が家族国家観によって融解した点である。未明は大正期、ブルジョアとプロレタリアの間の階級対立を自覚し、後者の立場から「階級闘争」を推進していた。例えば、「自己の悩みは、即ち自己の属する階級的の悩みである。自己を桎梏の苦しみから救ふには、階級にまつはる鉄鎖を切断しなければならぬ」(「闘争を離れて正義なし」「中央公論」大正一一年七月)といった発言は、その一端である。しかし昭和初年以降、社会主義運動・思想を徐々に放棄した未明は、日中戦争に至ると、天皇制の賛美を始める。その賛美の仕方は、天皇という至上の権威を持ち出すことで、国民間の階層差を無化し、日本国を一つの家族に見立てること、国民をあまねく包摂しようとするものだった。階級闘争の主役である労働者階級は、「陛下の赤子」(「日本の童話の提唱」「報知新聞」昭和一四年九月二〇〜二三、二五・二六日)へ転じてしまったのである。

二つは、民衆の受難に寄り添う反戦意識が、施政者目線の聖戦賛美によって一掃された点である。大正期の未明は、戦争における国家と民衆の利害を相反するものとして捉え、主に後者の立場から作家的想像力を働かせていた。例えば、童話「強い大将の話」(「読売新聞」大正九年一月一五〜一八日)では、戦争指導者の栄誉の裏にある、無数の屍と、遺族の悲嘆が描出されている。翻って、戦中期の未明はどうか。彼は「東亜新秩序」「アジア共同体」「八紘一宇」といった国是のスローガンを復誦し、「早く大きくなつて、お国のためにつくしたいとは考へませんか」(「子供達に」「僕はこれからだ」フタバ書院成光館、昭和一七年一月)と、子どもに戦争

協力を焚き付けている。かつての反戦作家は、忠実なる「帝国の臣民」へと様変わりしてしまった。

三つは、資本主義批判の動機が、格差批判のヒューマニズムから資本主義がもたらす人間性の墮落へとシフトした点である。大正期の未明は、先ずもって富の偏在の観点から、資本主義を批判していた。例えば、「富む者は益々富み、貧しく、働く者は、益々苦しくなるといふのが現時の状態である。子供が病気をしても、思ふやうに手を尽してやる事が出来ず、また、親が病気で仕事も休むことすら出来ないのが、吾等、無産階級の有様である」(『本然的の運動』「新潮」大正八年九月)と、一般勤労者の貧困を嘆いている。だが、戦中期の未明は、資本主義が人間の金銭・物質への崇拜を生み、結果、「金銭が人心を腐食し世道を頹廢したことは、到底酒や、煙草の比ででなかつた」(『美しき夢を持って』『新日本童話』竹村書房、昭和一五年六月)点、換言すれば、資本主義に伴う人々のモラルの変質を問題視している。もっともこれは、前景化していなかつただけで、大正期にも伏流していた未明の思想的特徴だ。

なお、上記の転向に関して、未明は一切、弁明や反省の言葉を口にしていない。

注

(1)「声明書」(『童話運動』昭和四年一月)には、「資本主義は政治的経済的に有らゆる者を蹂躪して余さぬ。我等の児童も亦その毒牙を免れては居らぬ。(中略)本来、児童文学作家の役割は、児童を一切の害患より庇護し健康なる成長を遂げしむるにある。今やそれをなし

得るものは我ら反資本主義児童文学作家のみである」との記述があり、自分たちを「反資本主義児童文学作家」と位置づけている。また、「労働祭の話」(『童話の社会』昭和五年五月)には、五月一日も稼働させられている煙突が「おれたちの親方は、わからずやで、メーデーなんかしないでいいといつてる人だからな」と、悲しそうに、いひわけし、休業中の煙突に「まだ、そんなわからずやが、この世間におけるのかなあ」と同情される寓話的エピソードがある。

(2) 山中恒「戦時児童文学論」(大月書店、平成三年一〇月)、小笠裕二「解説(教化)の意識」(同編『小川未明新収童話集4』日外アソシエーツ、平成二六年二月)

(3) 菅忠道「日本の児童文学と小川未明」(『文学』昭和三六年一〇月)、上笙一朗「戦後の小川未明の思想」(『日本児童文学』昭和三六年一〇月)、砂田弘「評伝小川未明」(同編『新潮日本文学アルバム 小川未明』新潮社、平成八年三月)

(4) 鳥越信は、「日本少国民文化協会について」(『文学』昭和三六年八月)で、「この要綱が日本に於ける最初の児童文化統制であるばかりでなく、まさにそれゆえに、終戦までの児童文化を規制した根本的理念」であると述べ、「要綱」が児童文化の国家統制に与えた、理念的影響力を指摘している。

(5)『国体の本義』(文部省、昭和二年三月)には、「抑々我が国は皇室を宗家とし奉り、天皇を古今に互る中心と仰ぐ君民一体の一大家族国家である。故に国家の繁栄に尽くすことは、即ち天皇の御榮えに奉仕することであり、天皇に忠を尽くし奉ることは、即ち国を愛し国の隆昌を図ることに他ならぬ。忠君なくして愛国はなく、愛国なくして忠君はない」と、『臣民の道』(文部省教学局、昭和一六年三月)には、「皇国臣民は、畏くも皇室を宗家と仰いで、一国一家の生

活を営んでゐる。(中略) 万民愛撫の皇化の下に億兆心を一にして天皇にまつるひ奉る、これ皇国臣民の本質である。天皇への随順奉仕するこの道が臣民の道である」と、それぞれ記述されている。いずれも家族国家観をもつて、国民の精神的一体化を図つていゝと言へるだらう。

(6) 岡上鈴江は、『父小川未明』(新評論、昭和四五年五月)で、戦中の未明の様子を次のように振り返つてゐる。「自分が生まれた郷土、祖国を愛する念が人一倍強かつた父は、また純情で単純で信じやすい性格だつたから、『アジアの諸民族は欧米とは本質的に異なる特性を持つてゐる。欧米の植民地支配下で苦しむアジアの弱小国をすくい團結して新しいアジアをきづこう』という東亜共栄圏の理念がとなえられると、強い関心をもつてその記事をのせた新聞に見入つた。『おとくさんはほんとうに信じていられたんだよ。小さな国が大きな強い国に支配され、しばられてゐるけれど、どんな民族もその国はその民族の手で治められるべきだ。日本はそれに力をかけてやろうとしてゐるのだつていわれてねえ』と、母は後年、私に語つてくれた。つまり岡上は、未明が「郷土、祖国を愛する念が人一倍強く、『純情で単純で信じやすい性格』ゆゑ、大東亜共栄圏の理念に賛同したのだと解釈してゐる。親族の戦争責任を小さく見せたいためか、やや善意の解釈過ぎる嫌いはあろう。いずれにせよ、未明は『童話文学作家たるもの、現下の自然現象に対して、もつと感情が鋭敏でなければならぬし、国策に対して、殉教者の態度に出なければならぬのであります』(『童話精神の昂揚』『日本少国民文化協会報』昭和一八年一月一五日)とまで語つてしまつており、当時の国策に、何ら批判精神を発揮できていなかった点は確かである。

(7) 例えば、『金と犠牲者』(『朝日新聞』大正一一年三月一五・一六日)

には、「ただ、金をやる者、また金を受ける者、みんなが金の前に奴隷となつてゐればこそ、万事が金によつて解決が付いてゐるのであります。この意味に於て、私は、金は、階級を産んだに過ぎずして、人間性までも腐朽せしめたものと考へて憎まざるを得ないのであります」との記述があり、鉄道事故や自動車事故の際、支払われる賠償金・義援金は、人間性を「腐朽」させるものであると指弾されている。金が人命に置き換えられるわけではないのだから、悪天候の時は汽車を運休してしまえばいい(十日や、十五日荷物がある駅に停滞したといふ事はさまで大した問題でない)というのが、未明の考へだ。

(本学院生・博士前期課程三年)